

左半側空間無視の症状に対する整容がもたらす効果

(医)南東北春日リハビリテーション病院

作業療法部門 芳賀英子、佐藤智恵

【はじめに】

半側空間無視(以下 USN)を呈する症例では、日常生活(以下 ADL)において無視の影響が問題となることが多い。USN 症例の整容動作(髭剃り)時、無視の影響で左側のそり残しがあるのではないかと考えていた。しかし実際の治療場面において、左へ注意し、剃り残しなく行えた事に関して、過去の経験や鏡という視覚刺激の影響があるのではないかと推測した。そこで一連の整容動作に含まれる移乗動作・車椅子駆動に着目し、一回の介入にて動作及び視覚刺激入力前後での変化を比較・検討したので以下に報告する。

【症例紹介】

62 歳の男性で、2005 年 4 月 18 日に脳梗塞(左片麻痺)発症。ADL は入院当初左半側空間無視の影響大きく、車椅子駆動一部介助、移乗全介助であった。現在は、移乗軽介助～一部介助で、車椅子駆動監視～軽介助で経過中である。

【評価および結果】

整容動作および視覚刺激入力前・後で、移乗動作と車椅子駆動について以下の表に記す。

<移乗動作>	
動作前	・アームレスト把持位置に動作指示(+)
後	・アームレスト把持位置に動作指示(-)
<車椅子駆動>	
動作前	・バックレストへ押し付ける姿勢
	・左ブレーキに外しに口頭指示(+)
	・駆動スピード遅い傾向にある
	・駆動に伴い右側走行となる
後	・前傾姿勢
	・左ブレーキ外しに口頭指示(-)
	・駆動スピード速くなる
	・通路中央の走行となる

【考 察】

USN 症例の整容動作で左の剃り残しがないことを過去の経験や鏡を使用したことでの視覚刺激の

影響があるのではないかと推測した。

視覚刺激によって動作前後で比較・検討したところ、左への認識向上に伴い、視野の拡大が図れた。動作の変化としては、移乗動作の介助量軽減、車椅子駆動時の左への注意力、駆動スピードの向上へとつながった。

視覚刺激である鏡は、左への認識のきっかけとなり身体の動きをイメージしやすくし、自己の身体認知の向上、動作に伴う適切な反応を引き出すものとする。このような一回の介入で、対象とする症例に合った刺激の入力を行うことで、即時的な効果が得られるものとする。

今回の結果を元に、半側空間無視を呈する症例についての理解を深めて行きたいと思う。

【終わりに】

今回、ご協力頂いた患者様に心から感謝いたします。